

公文俊平氏（元政策研究会幹事）に聞く

文化の時代への先見性

―聞き手・阿部 穆



「文化の時代」研究グループの初会合で挨拶する大平首相。その左隣が山本七平議長（1979年4月9日・首相官邸）

政策研究会の中心は香山、長富の両氏

就 実 華 去

——大平さんが総理になられたのは一九七八年一二月で、亡くなられたのが八年六月で実質一年半だったのですが、亡くなられる前に、公文先生、佐藤（誠三郎）先生、香山（健一）先生のお三方をお願いをして、政策研究グループというものを作られたわけですね。これは幹事役として長富（祐一郎）さん、森田（一）さんがおられたわけですけども、お三方が最初に集まられて、そういうことをやってみようじゃないか、あるいは大平さんにインプットしてみようじゃないか、というようなお話は、どういうところから始まったのでしょうか。

公文 これは香山さんのアイデアだったと思うんですけども……。私どもは、それまで牛尾治朗さん（ウシオ電機社長）のやっておられた社会工学研究所を根拠地にして、三人で一緒に「グループ84年」というグループをつくって、いろんな活動をしていたんですね。最初が香山さんの書いた「日本の自殺」で、「文芸春秋」に掲載され、これを土光敏夫さん（元経団連会長）が読んでいたく感激されて、一〇万部かなんかコピーをとって配ったという。これは、のちに拡大・増補されて単行本になりましたけども。そのあたりがきつかけになって、他にも何人かの方が参加して、もう少し世間に対していろんな問題を訴えて行かなければいかんということもあって、たしか大きな書き物としては最初は『日本共産党「民主連合政府綱領」批判』というを本を、グループの名前で出しました。大平さんは多分、「日本の自殺」を読まれたんだろうと思うんですけども、それで土光さんから紹介が行ったのかなあ。ともかく大平・香山会談というものがあってね、それで二人は意気投合した

というか、非常に面白いということになったんですね。しかも、たまたま森田一さんは、われわれの（東大の）同期です。それから長富さんは自身ですと「グループN」というんですか、電ケ関のお役人の間の研究会を手広く組織していて、顔が広がったのですね。森田さんと長富さんがベアをつくって、それから香山さんと、その関係で佐藤さんと私と……。私が一番若いんで、あまりそういう概要に触れるところは知らないんですけども、「やらないか」と話があり、「それは面白い。やりましょう」というんで、いろいろ企画を練り始めた。もちろん、大平さんが総理になられる前の話ですよ。

——「大平正芳の政策要綱資料」は、宏池会の安田（正治）さんとかフリーの福島（正光）さんらも関わったわけですか。

公文 もちろんそうだと思います。でも、あれは香山さんが非常に力を入れていましたね。

——あれは大平さんの最近の発言を、新聞を中心にテーマ別に詳細に拾いあげていますが……。

公文 香山さんというのは、そういう記録をとったり資料を整理したりすることが、非常に上手というか好きというか……。沢山、たちどころに出してくるんですよ。

——私の記憶によると、大平さんは総理になられる前後、何か村上泰亮さん（東大教授）の書かれたものに興味を持っておられたような気がするんですが、それは関係ないですか。

公文 それもあるかも知れませんが。村上さんは三木（武夫）内閣時代に相当、積極的に関与して、「生涯設計（ライフ・サイクル）計画」を鈴木淑夫、蠟山昌一氏らとグループを作って協力したんですよ。だから、村上さんは「二代にわたってやるのはよろしくない。だから今回（大平内閣で）は私は退かしてもらおう。次の新しい顔振れでやるように」と言われました。

——今のお話だと、大平政策研究会の中心になったのは香山さんということですか。

公文 そうですね。香山、長富のお二人ですね。

——香山、佐藤両先生と研究会の幹事の選び方について、どんな相談をされたのでしょうか。

幹事の選び方と研究員の構成

公文 その頃、三人とも四〇代の半ばでした。この世代で一番頼むに足りる人をなるべく沢山、集めて幹事になってもらおうということでした。少なくとも、われわれ三人で仕切るとか、他の人を排除するということは絶対にやってはならん、という考えでしたね。それから社会科学系だけでは、まずいので、自然科学系を入れないといけないと思いました。それで茅陽一さん（東大教授）とか石井威望さん（東大教授）とかにお願いしました。清水博さん（東大教授）というとてもすばらしい方がいらつしやるのを知ったのも、その中ででした。それから関西のグループが大事だよということ、高坂正堯さん（京大教授）とか山崎正和さん（阪大教授）に入ってもらったのです。この点は特に香山さんが非常に気を使っていましたね。

——たしかに、京大の東大に対する対立意識は強烈ですからね。それから牛尾さんの社工研と先生方との関係はどうだったのですか。

公文 （株）社会工学研究所というのは牛尾さんの会社で、青山の豊川稲荷のところにありました。会社の業務自体は黒川紀章さん（建築家）を中心に運営されていて、黒川さんが所長、牛尾さんが社

長です。われわれはその一角に間借りをして、牛尾プロジェクト的なことをやろうというので集まったのです。牛尾さんと浅利慶太さん（演出家）と私たち三人で、よく集まっていましたね。

——それで、香山、公文、佐藤の三先生の役割分担というか担当というのは、どういうふうになっていたのですか。

公文 一番、頻繁に大平総理と会っていたのは、多分、香山さんでしょうね。それから三人で行こうということもよくありましたけれども……。大体、彼（香山）がそういう役割分担を考えて、それぞれこんなことをするか、というような案を出して、私はそれに従って「そうだね」ということで……。一番、中心になったのは、その「政策要綱」を実現するような、もっと具体的な提案をどうするかということと、それから、これまで村上さんのようなケースがあつて、多少、学者が政策立案等々に関わるという関係ができていたし、佐藤（栄作）内閣時代に楠田実さん（産経OB・のちの総理秘書官）が中心になって山崎正和さんだとか高坂正堯さんだとか、かなりのブレインができていたんですけども、それはあくまでも私的なブレインという形だったんですね。ですから、そこをもつちよつとオーブンな形で参加することができるようにしたい、それから学者だけじゃ駄目だと考えた。これは霞ヶ関（役人）の若手がたくさん入ってくれて、そして一緒にやって議論をしようじゃないの、という二点ですね。そこから、後に「大平スリーハンドレッド」と呼ばれるような、つまり将来、霞ヶ関の中核になるような若手の官僚、これからの日本の学界を荷担うような学者たち、それから現在、リーダーであるような方々を集める。企業からも勿論、数はそれほど多くはありませんけども、将来、有望な中堅の方々に参加してもらいました。

実 — そうすると、官、学、産共同ということですね。いま、楠田氏が関係して佐藤内閣の時にいる就 いろいろやったのは、私も楠田氏の後輩でよく知っていますが、あれは佐藤さんが政権を取る前に、華 「Sオペレーション」というものをやりましてね、池田（勇人）さんに対抗するにはどうしたらいいか、ということと愛知探一さん（衆院議員）をヘッドにして、いろんな方を集めて、三菱の岩崎ハウ去 去か何かチームを作って、そこで出てきたのが沖縄返還の提案でした。そこに若泉敬さん（京都産

業大学教授）なんかが入ってくるわけですよ。だから、あれはかなり政治的な政、官、学グループだったわけですが、政策研究会の場合は、むしろもつ少し、一大平内閣とか自民党とかということじゃなくて、かなり長期的なビジョンといえますかね、そういうことがあつたんじゃないかという気がするんですが、どうなんでしょうか。

公文 日本全体のためにという、つまり大平内閣の政策をつくるというよりも、一九八〇年代にわたって日本が直面する課題に対して、どういう政策を考えるかということでした。これは非常に強い問題意識でした。と同時に、われわれは大平さんの書かれたものを読んで、大変感激していますね。「大平正芳の時代認識」（『大平正芳 政治的遺産』に収録）にも私は書いたんですけども、七〇年代の初めぐらいから、大きな日本社会の転換期がきたということを鋭く見て取って、政治はこれに対応して行かなければならん、という問題意識を持った人としては、大平さんはまことに随一であると思いました。だから、そういう点で、そういう優れた政治家と一緒に仕事ができる、こんな嬉しいことはないという感じは、率直に言って持ちましたね。

— それで、実際に大平政権ができて、先生方の考えられたいろんな研究の成果、あるいは結論み

たいなものを具体化するということになるわけですけれども、その前に、この政策研究グループというものを、もう少し掘り下げようじゃないかということで、研究グループが九つできるわけですね。その経緯は……。

公文 具体化するどころか、まだ全部の答申が出ないうちに大平総理が亡くなられちゃったわけですからね。亡くなられる前に答申が出たのは、対外経済政策と環太平洋連帯と家庭基盤充実の三研究グループの報告書でした。

——公文先生は、対外経済政策と文化の時代と文化の時代の経済運営の三研究グループの幹事、研究員をされたわけですが、その分担はどういうことで決まったのですか。

公文 九つの研究を三人で三つずつ分担したのですが、要するに、私は経済関係とその他を分担したわけですよ。香山さんが田園都市構想、家庭基盤充実と他に科学技術の史的展開を、佐藤さんが環太平洋連帯構想、総合安全保障の他に多元化社会の生活関心をとという具合に、それぞれ自分の専門ないし興味あるテーマを選んで、経済関係の二つは私ということになったのです。しかし文化の時代というのは、誰がやっているのか分からないし、他の二人はすでに三つ担当しているので、「お前やれ」「いいでしょう」ということで私が担当になったというわけです。私自身そのテーマに興味はあったということもありましたが……。

——文化の時代に興味があつたということですが、「大平正芳の時代認識」にも書かれているように、これからは文化の時代だ、新しい歴史的段階に進むので、真の幸福と生き甲斐を見出すためには、国民の意識に路をつける必要があるのだ、ということをお大平総理が言われて、それを具体的に、どう

いうふうな骨格をつくって行くのかというところで、公文先生を始めとする皆さん方をお願いするわけですね。それについては、公文先生はどんなふうなことを考えられたのですか。

文化の時代を担当しての感想

公文 文化の時代を担当して非常に困ったのは、大平さんのいう文化の時代というのは長すぎるということでした。これからは経済の時代が終わって文化の時代だ、あるいは近代から近代を超える時代へ入って行くのだと言われるわけですね。その気持ちはよく判るのだけれども、それはなんぼなんでも言い過ぎではないかと思つたのです。経済の時代はそう簡単には終わらないし、近代もそうやすやすと超えられては困る。近代はそう簡単には終わらない。しかし文化もこれはこれで大事なことなんだと思ひ、そこをどうしようかと非常に悩んだのです。それで考えたのが六〇年周期説の中の一つの五年として文化の時代を位置づける、つまり、政治の時代、経済の時代、文化の時代、紛争の時代と時代が移って行くというふう考えた、その文化の時代が今なんだということで、私は何とか自分では納得したのですね。

——六〇年周期説というのは、どういうことですか。

公文 六〇年で一巡するということです。三〇年下り、三〇年上り、三〇年下り、三〇年上りというふうな恰好で、意識や制度が変わって行くというふうに見たのです。その前に、一五年周期という考え方を、一九七〇年代の後半に何人かの人が唱えたんですよ。山本七平さん（山本書店主）だとか深田祐介さん（作家）だとか日高六郎さん（東大教授）だとかが、一〇年じゃなくて一五年で時代は転換する

と指摘された。それは、たしかに尤もだと私も思ったのです。戦争を大体一五年やって、それから戦後になると「暮らしは低く思いは高く」の文化国家で行こうと言ったのですよ。憲法を改正して政治改革をやった。つまり政治（改革）の時代の一五年があった。それから高度経済成長が五〇年代後半から始まってこれまた約一五年続き、七〇年代の始めには高度経済成長の終焉が言われた。それで次は何だということになったのです。ですから、それは文化の時代なんだと考えたわけです。大きくみて、紛争、政治、経済、文化という四つの一五年期を合わせると六〇年、これで一巡すると考える、ということに行くわけです。ともかく一五年ごとに時代が変わる中で文化の時代と考えたわけです。

——それはよく言われる循環論とは関係ないのですか。

公文 一種の循環論ですけどね。

——それから大平総理は脱経済というか経済を超えるという話をしきりに、その頃、言われていたが、脱経済といえ、いきなり経済は二の次で、文化だというふうに取り勝ちです。そこるところを、いま、先生がおっしゃったように、いや、そうじゃないんだ、経済も大事であると。しかし、だんだんこれから人間の生活という文化が重要になってくるのだ、ということの肉付けといますかね。

公文 それ（肉付け）をしなければいけないということで、つまり経済の重要性はなくならないとしても、高度経済成長という時代は取り敢えず終わったという認識をもつこと。次ぎに反省をして、心の豊かさとか自然との共存、環境問題といったようなことを考えるフェーズ（局面）は当然くるわけですから、そういう意味では文化の時代と言っても、全然、おかしくはない。文化の時代がきたと

実 いう自覚をもつことは、というのは広い意味で言うと、人間が自分を反省するということですからね。就 普段、無意識的に考えているようなことは何であつたのか、どういふ価値観が自分たちの中にあつて、華 大切なものなのか、ということを考えてみなければならぬ、という点では、まさしく大平総理の言われる通りだということです。しかし、経済も大事だよということで、長富さんが一工夫して「文化の時代の経済運営研究会」というのをつくつたんですよ。

——考えてみると、佐藤先生の担当された総合安全保障研究会、あるいは香山先生の担当された家庭盤充実研究会も大事ですけども、一番、大平総理が興味を持たれたのは文化の時代研究会じゃないですか。

公文 そうかも知れませんが。残りものといったのは、三人の中でテーマを決めていつて残つた一つが若い私に回つてきたという意味ですから、重要でないということではありません。もちろん、大平さんとしては、非常に好きなテーマだったと思いますね。

——政策研究会での大平総理の発言とか表情で記憶に残っているものがありましたら……。

公文 文化の時代の研究会で、座長席に山本七平さんが据つていらつしやるのを、すごく嬉しそうな顔で大平総理が見ておられた記憶がありますね。

——私ら当時、政治記者として、そんなに総理大臣が張り切つたつて、文化の時代に急になりはしないんじゃないかなあーと感じたんですけど。しかし、この前、公文先生がお書きになつた「大平正芳の時代認識」を拝見すると、時代の先取りといえますか、大平総理自身も、それに協力された先生方も、矢つ張り新しい歴史的な段階にどうやってキャッチアップするか、という模索みたいなのを

していたわけですね。

公文 そうなんですよ。過去を反省し将来を模索するというのが、まさに文化の時代の特徴なんだ、というふうに考えたんですね。

——それを大平総理が誰かにインプットされたのか、それとも自分で考えたのでしょうか。

公文 自分で考えられたんじゃないですか。七〇年代の初めに、そういうことをいち早く言われた。まだ世の中はそんな感じではなかったですね。まだまだ高度経済成長が続くと見て、これからはアジアへどんどん出るぞという時だったんですね。

——だから、それが結局、大平総理が亡くなって挫折して、稔らないわけですね。むしろ先生のご専門の分野である情報革命みたいなものが、アメリカのほうがずっと先取りしてしまうのですね。

公文 そこが逆に私も、後になって反省したというか、ちょっと「文化」を言いすぎたかなという面もあってですね、経済が経済運営になっちゃったということだったのですが、実は考えてみると、すでにその頃から新しい技術・経済革命、情報革命の種子が蒔かれて育っていたわけですね、一九七〇年代は。

——日本ですが、アメリカですか。

七〇年代に情報革命の種子が蒔かれていた

公文 アメリカもそうですし、日本だって当然、そうあって良かったんですよ。もともと、情報化ということを出したのは、日本が世界で一番早かったわけですから。六〇年代の後半のことです。

実た。ただ日本は、その後それを資源危機とか心の時代とか文化という問題に直面して、情報化への関心がいったん消えてしまいました。違うものだと思ってしまったわけですね。実は情報化というのは、華文化の時代と直結していたはずなんです。ところが、それを何かコンピューターとか情報処理とかいうのはそんなに大したものではない、価値が小さいものだという意識がどっかにあって、そこへ石油危機がきたものだからね、そんな（情報化の時代だなどという）ことを言っている暇はない。資源を節約し、過去の物づくりの力に頼って立ち直らねばならぬというふうな、時代の雰囲気になってきた時だったわけですね。ですから、どうしてもそこで文化というと、心だ、自然だというほうが強調されてしまう。

——当時の雰囲気としてはコンピューターというのはハードだと思っていたんですかね。つまり作れと言われればいつでも作れるよ、というようなもので……。

公文 まだとにかく大型機全盛ですね。あの時分では、マイクロチップスは出てきていたんだけど、パソコンなんていうのは、ほとんど有るのか無いのか分からない、ようやく七〇年代の終わりになって、少しずつ出てきたようなものでしたからね。

——企業によっては給料の計算とかに使いはじめた所もありましたけれどもね。

公文 それは、しかし皆な大型機ですよ。せいせいオフコン（オフイス・コンピューター）という奴ですね。まだパソコンというものが、そんなに出てきていなかったけど……。話が飛びますけど、なんでアメリカは、八十年代に入ってからですか、それとも八十年代の終わりから九〇年代の初めにかけてからですか、急速に情報ハイウエーといいますが、進んできたのは……。

ジャパン・ナッシング論は九三年終わりから

公文 これもまた二転三転して、話がこみ入るのですけども……。アメリカは、まず半導体の発明とかの点では、七〇年代に先に出たわけですよ。ところが日本は、すかさず追い駆けたわけですね。ですから七〇年代の後半から八〇年代の前半にかけて、パソコンは大したことはなかったにしても、メモリーだとかチップだとかいう点では、日本はダーツと前へ進んで行ったわけですね。それと石油危機を見事に克服したことで、そこで日本は世界一であると思込んでしまつて、その次の情報化がお留守になつてしまつたということでしょうね。その間、アメリカは日本型経営の勉強を必死になつてして、いわゆるカンバン方式などをリーン・プロダクションというコンセプトで理論化して、つまり日本が持っているなかで良いものは探るといふ方向に進んだ。それから、メモリーなんかで勝負してもしょうがないから、高度なCPU（中央演算装置）を作るといふ方向で切り開いたわけです。ですから八〇年代の終わりには、見る人を見ると、もう今度はアメリカだというのは、全部じゃないですけども、アメリカの中でも判つていた。しかし全体としては、まだ九〇年代の最初の二、三年、続いていてですね、まだまだ日本強しとか侮り難しとかいふ論調があつた。それが大きく転換して、日本遅れたりとか、ジャパン・ナッシング論になつたのは、一九九三年の終わりでした。

——そこで話が元へ戻るんですけれども、折角、先生方がそういう処方箋といふか方法を出されて、大平内閣で総理が亡くなるまでに三つの答申が出るわけですね。あと伊東（正義）首相臨時代理の時に残りの六つが出るわけですが、とに角、先生方の結論が出たにもかかわらず、後の内閣では、中曾

根（康弘）内閣が少し興味を持ったようですが、あまりその処方箋を具体化するところには行かなかつたですね。

公文 直接にはね。しかし、中曽根さんは非常に真剣に受け取って下さつてですね、「あの政策を継承するのが、私が保守本流になることだ」という言い方をされていたですよ。

——劇団四季の浅利慶太さんとか牛尾治朗さんとかいう方々が、相当、強く中曽根総理に大平内閣のあの研究グループの答申の活用を進言したと聞いているのですが……。

公文 私もそう聞いていますし、それから研究グループそのものを中曽根さんが使うべきだという進言をしたと聞いています。

——しかし、中曽根さんはかなり長期政権だったんですが、それでもちよつといまのお話の情報革命に遅れたわけですね。

公文 はい。そもそも九つの研究グループの答申の中には、情報革命の話はそんなに入つてなかつたというか、その点がちよつと残念ですね。

——それでもう一つは、先生が書いておられる中で、大平総理の「楢田の哲学」に関してですが、これは何なんでしょうね。普通、政治家はこんな話はないものですよね。極端なことを言うのと、主流と反主流があつて、両方に緊張関係があることが、その党、政府にとって良いことだ、なんて言うわけがないですよ。

公文 でも、大平さんは真面目にそう思つておられたですよ。連合にしたつて、パーシャルな連合で行こうかとかね。一つがドーンと全部を倒してしまうとか得票を全部取るとか、いう考え方がおか

しいと。オール・オア・ナッシングではないということですね。楢田の二焦点論を重視しておられるということ自体は、香山さんに教えてもらったんですけどね。「大平さん、そう言っているよ」と。それで大平さんの本を読んでもみると、「あー、そういうことか」と判ったのです。これは非常に良い感覚じゃないでしょうか。それこそ、いまの情報化時代を先取りしていると言ってもよいですね。

——それは、非常に正と反といいますが、それがあって、緊張関係が……。

情報化時代を先取りした大平さん

公文 絡みながら、しかし一体として、一方がなくなるとは他方もなくなる、という相互依存であり、補完の関係に立っているんだという理解ですね。

——それは先生が見ておられて、大平政治がそういうふうな……。

公文 志向されていたと思いますよ。税務署長として税金にしても、ただ厳しく取り立てるのが能ではないと考えておられた。ある意味では少し余裕を残して、上手いことをやるくらいの余地がなければ、また政治にはそれくらいは大目に見るくらいの度量がなくては人はギスギスして生きて行けないといったような考え方もされていた。さらに、そこからの系というのかな、ものごとはピシャッと割り切るべきものじゃないと……。

——それからもう一つ、先生が書かれたことですが、地球社会時代の科学技術の発達に伴う人類の相互依存関係を、しきりに大平総理は言っておられる。

公文 これも非常に早いですよね。世の中がグローバルゼーション（地球化）なんて言い出したのは、九〇年代になってから、つまり米ソの冷戦が終わってからですよ。大平さんは、七〇年代の初めですから、それよりもほとんど二〇年ぐらい前に言っておられたわけですよね。

——そういう意味では、日本の政治家としてはかなり先見性があると……。

公文 抜群にあったと思いますね。それから、グローバルと言った時も、九〇年代のとくに前半はまだ、これからはアメリカ的な競争時代になるという言い方をしている、そうでもないみたいだよという反省は、やっと今頃になって出てきていると思います。つまり、コンペティション（競争）じゃなくてコラボレーション（協力）のほうが、もっと大事だな、コミュニケーション（交流）も大事だ、という反省が、他ならぬアメリカ社会の中から出てくるんですけれどもね。これも大平さんは先取りしているわけです。まさに、そういうのが七〇年代以来の時代の流れである、ということをやっと見ていたんですね。

——そういう先見性を持った政治家がいたというのは、良かったかも知れないし、あるいは挫折したというのは残念だということですね。先生ご自身が個人的に接触されて、大平正芳という人はどんな感じの人でしたか。

深慮な面と好奇心の塊の面と

公文 ある種の魅力が非常にある方でしたね。私は佐藤（栄作）さんにお目にかかったことはないんですけど、聞くところでは、ある種の威厳があって、なかなか面と向かってものを言いくらった

という話を聞いたことがあります。三木（武夫）さんはかなり個人的に親しくお付き合いさせていたことがありましたが、三木さんは多分、息子世代にあたる私のような者にとつては、いわゆる好々爺という感じでした。しかし大平さんは、そういうのではなくて、ある意味で対等な、しかし実に「深く考えておられるな」という感じと、それから好奇心の塊みたいところがあつて、あれこれと質問をされてですね、そして「フウン」と思うと、本当に嬉しそうな顔をなさるのですね、何とも言えないいい笑顔がね……。中曽根さんは、それに対して秀才ですね。（旧制）高校生の氣質がまだ残っているようなところがあつて、これまたなかなか魅力があるんですけど、大平さんとはタイプが違いますね。

——よく言われることですが、大平さんはキリスト教徒であつたので、普通の政治家ではない何かですね、祈るようなものがあつたんじゃないかと思うのですが、それはどうですか。

公文　そうかも知れません。しかしキリスト教の話をしたことは一度もないんですけどもね……。それから全く無責任な印象で言うと、キリスト教徒だつたから、大平さんのような政治家が生まれたのか、大平さんだつたからキリスト教徒にもなつたのか、というのかな……。四国の田舎で、ある意味で遅れた日本で、先進的な文明を見ていて、多分、灼けるような憧憬の念とか、英語を学びたいとか、といったような思いがあつて、そこから自然に、その世界をつくっている根底にはキリスト教があり、個人と神との関係というものがある、と理解して、それでキリスト教に入信したと。しかも、カソリックじゃない、無教会派ですよ。近代意識を持った、日本の当時のインテリが多分一番受け容れやすい宗教だつたと思います。

大平研究会の処方箋がいまや常識に

——先生方のつくられた処方箋は、二〇年後の現在の時点で見ると、どう評価されますか。

公文 私も九つの報告書を全部、詳しく読んだわけではないのでよくは分かりませんが、大きくみて、例えば総合安全保障とか、環太平洋連帯とかいう考え方は、もう常識になっていますね。ですから、そういう意味では、当時はなかなか言えなくても、勇気を持って言ったようなことが、この二〇年の間に「もうそんなことは当たり前ではないか」となったということもありませんね。他方、具体的な制度改革については、なかなか進まないというか……。私は、その頃から、さっきの六〇年周期で考えると、改革の時代というのは、文化の時代の次に紛争の時代があるので、文化の時代になつてから三〇年経たないとこないのです、そうすると二〇〇五年頃からかなと、早ければまあ二〇〇〇年頃から本格的にやってくるのかなと考えていました。ですから、いま一生懸命こうやってはいるけれども、それが本当に世の中に具体的な政策提案として受け容れられて改革しようという大きな動きが出てくるのは、まだまだ先のことだろうなと個人的には思っていました。しかし、その時がくればきつと役に立つとも思っていました。その頃には大平研究会の処方箋に書かれたことの多くが日本の常識になって、その常識を基にして、例えば憲法改正の必要とか集団的安全保障とかといったようなことも、言えるようになって行くだろうと期待していたわけですからね。

——先生のなさっているグローバル・コミュニケーションというのも、あの当時は夢のような話だ

ったと思うのですが、もう現実になっていますからね。

公文 あの場合、インターネットなどは、まったく知られていませんでしたからね。

(平成二二年三月一五日、グローバル・コミュニケーションセンターで取材)

公文俊平(くもん・しゅんぺい) 一九三五年、高知県生まれ。東大経済学部卒、六七年東大教養学部助教授、七八年同大学教授、八八年ワシントン大学教授を経て、九年国際大学教授、同大学グローバル・コミュニケーションセンター所長、現在にいたる。大平記念財団発足当初からの運営・選定委員。著書に『社会システム論』『文明としてのイ工社会』(共著)、『ネットワーク社会』『情報文明論』など多数。